

環境事始 十三帖 農薬退治の開始

横浜国立大学 名誉教授 加藤 龍夫

カーソン女史の「沈黙の春」が出版されたのが昭和 37 年、日本では既に水銀農薬を全国に撒きその被害が激甚で停止になった。その後取っ替え引っ替え農薬を撒き続けて、日本の山野は壊滅、農薬は環境問題の最重点項目となって久しい。何時着手出来るかが懸案だったが、漸く専門に携わる人材が現れ Go サインを出した。早稲田の理工学部で物理・数学首席の槌田博である。「あんた槌田龍太郎と言う化学の大先生を知っているか」「それは私の祖父です」「えっ・・・」の問答があった。まず大気自動採取機の発明を命じた。それが完成した時事件が生起する。前橋の青山美子医師が訪ねて助けを求めた。病院近くの田中種苗会社が農薬ガスを放出して、患者が殺到し、遂に職員まで倒れて、一週間閉院となった。県に訴えて相手にされず、自ら検知管を試みて役立たず、困った時偶々看護婦のミツちゃんが NHK の臭いを当てる番組を見てあの先生なら測れると注進したのだ。委細承知と時間毎大気を採取して、風向きで毒の濃度が変化する記録を取り、発生源の特定に成功した。この調査では同時にビニルハウスの方角から環境ホルモンの DOP が蒸発して来る現象を発見、世界初めての測定例となった。これを契機として群馬県下から始まり農薬汚染の実態を軒並み調査して廻った。空中散布の水田、下仁田の芋畑、観音山の松林、ビニルハウス内など。こうして更めて農薬禍の酷さと度し難い人々の無知、役所の権柄を知った。松枯れの農薬使用状況は以下の如くであった。畑の一角にヘリポートを設けヘリコプターに農薬を積み込む。大きな盥でスミチオン原液と水道水を適当に混ぜるが、いい加減なものだ。付近には子供が遊んでいて、危険極まりない。林の中で白い敷布を拡げて待っていると梢すれすれに散布が始まり、十分後蝶や蜻蛉やかなぶんや羽虫や蜘蛛やあらゆる虫が雪の如く降って来る。生物皆殺しの地獄図がそこにあった。動くものが只一匹、思わぬ獲物と穴にいた蟻が芋虫を引いて行くとやがて毒が回り痙攣して静かになった。更に布に累々と重なる死骸にマツノマダラカミキリを探して見付らなかった。当然の事だ、松枯れはマツノザイ線虫が原因でこれを運ぶカミキリを殺して防止するという理屈が嘘だったから。本来松は陽樹と言って特に赤松は日当りの風通しのある水捌けの好い土地に適している。松茸は古都京都周辺、瀬戸内製塩地、美濃陶業地の燃料に木を伐った里山で採れた。それがプロパンの普及で人が山に入らなくなり、そこに伊勢湾台風で松山が荒れて藪化して松茸が出なくなった。山は元に戻ったに過ぎない。それを農薬会社が儲けの好機と役所

と結託したものだから、良識を期待しても無駄だった。田畑に関しても同じこと。農薬撒いて却って益虫が減り害虫が増え、土壌が死に人が神経を冒されてまともな対応が出来ない。筑波の環境研究所の知人に、「あんた等どうして農薬汚染の仕事をしてしないのか」と訊いたら、「農薬被害をテーマにしたら予算が下りないのです」と応えた。これが国の実情で本当の話。だから先生達は独り大気汚染を調べ捲り、新聞テレビで人々の関心を高めるに努めた。それしか方法がなかったのだ。ただその後青山医院は唯一農薬症の専門病院として、遠く東京からも患者が押掛け駐車場は大拡張、大繁盛して多くの人命を救っている。農薬による環境破壊は過去の話でなく、この人類の犯罪は未解決で現在進行形である。